写真上:「誠意・実行」をモットーに掲げ、今のお客様や従業員を大切に考えておられる佐々木浩二社長。
写真下左:浩二社長の弟で専務取締役の佐々木浩様。
写真下右:本社近くのストックヤード。

株式会社サンノウ興業

代　表　者 ：佐々木 浩二
本社所在地 ：東京都大田区大森北1-23-7　NAVALビル7F
設　　立 ：2000年
従業員数 ：100名
事業内容 ：土木工事、残土処理、建設機械及びダンプカーのリース
URL ：http://www.sannoukogyo.co.jp/

お客様 見聞録 File 26

株式会社サンノウ興業

圧倒的スピードで首都の土を運ぶ。百年先を見据えた礎を築くために。

首都圏では、マンションや商業施設など、膨大な数の建設工事が連日行われています。
課題となっているのが、工事現場で発生した残土をどこに運んでいくか。
処理場の不足が深刻な状況下で、近年さらに存在感を増しているのが、
東京など首都圏5ヵ所に残土のストックヤードを構えるサンノウ興業様です。
代表取締役の佐々木浩二（さささこうじ）様と、専務取締役で弟の佐々木 浩（ひろし）様に、
現場での掘削から残土処理まで自社で一貫して遂行することへのこだわりや
キャタピラーの建設機械に求める役割などについて伺いました。

山王の地で、兄弟2人から始まった物語
創業当初より続くキャタピラーとの信頼関係

東京都の23区で最も南に位置し、羽田空港を擁する大田区。その名前の「大」は「大森」、「田」は「蒲田」から取ったものです。区の中心の一つである大森エリアでは、明治初めに新橋～横浜間の鉄道開通に伴い、1876年に現在のJR大森駅が開業。駅西側の山王は高級住宅街として開発が進みました。

翌年には、駅北側の線路沿いで発見された「大森貝塚」から、縄文時代の土器などが発掘されました。大森の名前は、日本の考古学の発祥の地として知られています。

それから120年以上の時を経て、掘り起こした土を運ぶという建設・土木で重要な役割を担う企業を、大田区で生まれ育った佐々木兄弟が創業したのは2000年。サンノウ興業様の社名は、創業の地・山王が由来です。

「2人で独立しようと、私と弟がそれぞれのダンプカー2台で始めた会社です。最初の頃は仕事がない日もあり、できる仕事をとにかく引き受けました。新しい車両や機械は現金で買うしかなかったので、20代の間は2人でひたすら働きました」

社長がまず目指したのは、残土処理を任せてもらえるのに十分な設備を自前で持つことでした。すなわち、ダンプトラック、ストックヤードと呼ばれる中間処理場、そして建設機械。 この3つをバランス良く揃えることによって、一括して仕事を受け入れることができると考えたのです。

数年経って事業が軌道に乗り始め、念願の建設機械を中古で購入することができました。1号機はキャタピラーの8トンクラスのミニ油圧ショベル。修理などのサポートを通じて、本格的にサンノウ興業様とキャタピラーのお付き合いがスタートしました。

「機械自体もパワーがあり、ブームやアームも丈夫なので気に入っていました。キャタピラー販売店から直接買ったわけではないのに、しっかりとサポートしてくれて。その後、新しい機械を買い続けるようになったのは、古川さん（現 日本キャタピラー東京西営業所 営業部長）との出会いが大きいです」と社長。専務も「小さい会社なのに、創業当初からとても大事にしてくれました」と振り返ります。

住宅地のマンション工事現場で作業を行う308 CRと301.7 CR。
オペレータの広瀬嘉様。

現場用やストックヤード用のショベルを次々と購入し、会社も順調に成長を続け、現時点で建設機械の数は67台。その約半数がキャタピラー製品です。残土処理の業務はダンプトラックが主役で活躍するイメージがありますが、ダンプトラックや回送車はほぼ同数の計74台。サンノウ興業様で建設機械が重要な役割を果たしていることが数字からもわかります。

「ここまで成長できたのはキャタピラーさんのおかげ」と社長が話されるように、キャタピラーと固い信頼関係を築いてきました。ダンプトラックや回送車の購入においても、古川部長からの紹介を受けて、三菱ふそうの製品を使うようになったとのこと。2019年には同社がキャタピラーに協力する形で、Cat 320の体験試乗会をストックヤードで開催しています。

残土処理に油圧ショベルを積極的に活用 都市部ならではの静音性のニーズも

専務にご案内いただいたのが、目黒区内の住宅地にあるマンション新築工事の現場。基礎を築く前の根伐（ねぎり）工事もサンノウ興業様が請け負っており、Cat 308 CRと301.7 CRが稼働していました。

ダンプトラックが現場に到着すると、ロングアーム仕様の308 CRがアームを地下に深く下ろし、土をバケットですくってダンプトラックへと積み込んでいきます。驚くべきはそのスピードで、止まることなくブーム・アームの上げ下げや旋回を繰り返し、動きも非常にスムーズです。5分ほど経った頃には、荷台を満杯にした7トンダンプトラックはストックヤードへと出発していました。1日に15〜20台の車両が出入りし、100㎥近い残土を搬出するそうです。

308 CRを運転していた広瀬嘉（ひろせ さとる）様は、オペレータ歴約30年のベテラン。スピーディな作業が可能な秘訣について「機械自体の動きも速くなっていますが、特に意識はしていません。安全第一で無理をしないことが大事」と語っていました。

東京の現場は、敷地が狭くて入り組んでおり、隣の住宅との距離が近いのが特徴です。「308は足回りが強くて、狭いエリアでの旋回も得意。エンジン音も静かで近隣に迷惑をかけることは少ないと思います」と広瀬様。キャタピラーの機械全般については、長時間乗った時の疲れにくさや、安定してパワーが発揮できることを評価されていました。

また、矢板が張られた地下では、301.7 CRが土をかき集め、308 CRが運びやすいようにまとめていました。細かな作業にミニショベルを活用することで、効率的な土の搬出を可能にしています。

広瀬様は普段、他の現場ではアームが伸縮するスライド機に乗ることが多いそうです。都心部では10m以上も深く掘る現場が多く、サンノウ興業様でも10台以上のスライド機を保有しています。転倒しないようにオペレータの技術が求められますが、キャタピラーの最新機能で、フットペダルで操作していたアームの伸び縮みもジョイスティックのサムホイールでできるようになりました。

続いて訪れたのは、先ほどの現場の土が運ばれた本社のストックヤードです。環状7号線に面し、各現場からのアクセスが良く、1日に出入りするダンプトラックは平均200台 。Cat 325と2台の315が待機し、残土の現場からの受け入れや、行政の許可を受けた特定事業場などへの搬出を行っています。

ダンプトラックが到着し、土の積み下ろしや積み込みを行うと、休む間もなく次の目的地へ。ここでもCat 315が活躍し、まるで自動車レースのピット作業を見ているような圧倒的なスピードで、車両を送り出していきます。

残土のストック場で屋根のあるのは珍しく、土を濡らさずに品質を維持するのと同時に、周囲への騒音やホコリなどを抑えるメリットがあります。敷地には音量と振動の測定器が設置され、周辺環境に配慮して作業が進められます。

大田区京浜島のストックヤードも屋内型で、都内最大級の残土受け入れ量を誇ります。こちらは大型の車両も受け入れることができ、Cat 330のほかに910Kも活躍。お客様に販売する砕石や山砂も、いつでも運び出せるように準備されています。

「私自身も、不要な音を立てない静かなショベルの乗り方を追求していました。キャタピラーさんから機械を買う時には、静音性能 をリクエストしたり提案していただいたりしています」と専務は話します。地域との距離が近い都市部では、環境への細やかな気配りが事業の継続・発展のカギを握っています。エコアクション21※の認証も、近く取得する見込みです。

機械が増えることは純粋な喜び オペレータが快適に末永く働くことができる環境を

社長が創業以来ずっと大切にしてきたのが「依頼された仕事は100%断らない」。その理由について「そもそも当社を選んでいただいたからには、できる限りそれに応えて、お客様と長くお付き合いさせていただきたいのです」とご本人は説明されます。

依頼は建設会社や土木会社だけでなく、同業他社から受けることも多くあります。「困った時は助け合っていかないと。うち1社だけでは絶対に成り立たない仕事ですから」という社長の言葉通り、同業他社はライバルでありパートナー。車両やヤードをお互いに融通しあって横のネットワークを築くことは、自社のアドバンテージにもなります。

数多くの現場に100台以上のダンプトラックや建機の配置と進行管理、加えて5ヵ所のストックヤードの残土堆積量の把握や、全体の翌日以降のスケジューリングなどを専務が中心となって行っています。稼働率を上げることは利益に直結するので「配車チームの皆と一丸となり、総力を挙げて臨んでいます。その中で繁忙期にお客様のご要望通りの手配を実施できたときは、特にやりがいを感じる瞬間です」と専務は語ります。

都内にストックヤードがあると機動力に直結するのですが、建設するにはコストが非常にかかってしまいます。「2017年に京浜島のストックヤードを新設することができたのは、社長の大胆な発想と決断力であり、それが現在の会社の成長につながっている」と専務は続けます。

経営者としての胆力を持つ兄と、緻密に事業を動かす弟。まさにサンノウ興業の両輪である2人は子どもの頃から“はたらくクルマ”が好きで、この仕事を選んだのも自然の流れ。会社が成長して利益を上げると同時に、機械や車両が増えることには純粋な喜びも感じているそうです。「売り上げはもちろん大事ですが、当社を選んでくれた従業員のためにも、会社を長く続けていくことが一番」と社長。施設を整備することは、会社を百年先も受け継いでもらうための礎になると考えています。

業界全体で高齢化や人手不足が進む中で、サンノウ興業様が重点的に取り組んでいるのは、今いる従業員に末永く働いてもらうための取り組み。待遇面の向上のほかに、何でも話し合える職場環境の整備を進めています。

同時に建設機械などに求めているのが、オペレータが年齢や経験に左右されずに、安心して作業を進められることです。現時点で同社におけるICTの活用は、アームが屋内の天井を超えないように制御する機能などにとどまっていますが、今後は環境性能も重視していく方向です。オペレータの健康のため、エアコン機能などの導入もさらに進めていきます。

キャタピラーでは、マシンの性能の向上はもちろん、オペレータの方々が安全で快適に作業できる環境を整えることによって、ベテランから若い人までが現場で働き続けたいと思えるような製品の提供を目指していきます。

※ 環境省が策定した日本独自の環境マネジメントシステム

現場の進捗について話し合う浩専務（左）、目黒圭資営業部長（右）と日本キャタピラー 小宮セールス（中央）。

2017年に新設された京浜島ストックヤード。